

# プエブロ・ラグーナの辿った道 Groping for Their Way

青柳清孝  
AOYAGI Kiyotaka

私たちの長老よ、叡智に基づいて、彼らは私たちの過去をその記憶にとどめ、私たちが耳を傾けるならば私たちの今日を方向付け、私たちの未来に指針を与えてくれる。

彼らは尊敬に値する人々であり、決して粗末に扱ってはならない。長老はプエブロにとって価値ある資産であり、部族の歴史、文化、慣習の守り人であり、プエブロの子どもたちにプエブロの歴史、文化、伝統を受け渡すという希望を託す最上の人なのである・・・

(Elderly Code of the Pueblo of Laguna, Iwamoto,K.C. の論文より引用)

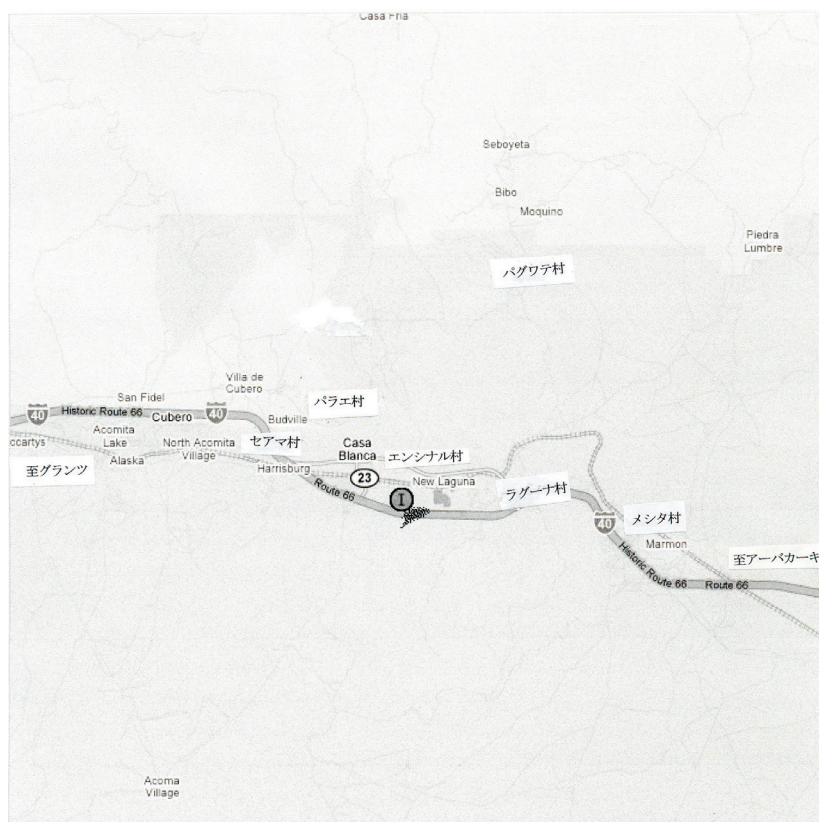
## 1. プエブロ・ラグーナ概観

アメリカ南西部には 19 のプエブロ・インディアンコミュニティが存在する。その大半はリオ・グランデ川沿いに分布しているが、プエブロ・ラグーナ (Pueblo of Laguna) の保留地 2,157 平方キロは、この流域からやや離れて、テイラー山 (3,471 メートル) 南麓、標高 1,600 ～ 2,800 メートルの高地に位置している。西 75 キロにニューメキシコ州の最大都市アーバカーキ、東 50 キロにグランツがある。インターステート 40 (旧ルート 66) ハイウェイがこの保留地の中を横断して走っている。ラグーナはスペイン語の湖を意味し、彼らの保留地に存在する湖からその名がついたもので、本来のケレス語の名称はカワイク (Kawaik) である。

ラグーナは東から国道沿いあるいはそれに近接して並ぶメシタ (Mesita)、ラグーナ、エンシナル (Encinal)、パラエ (Paraje)、セアマ (Seama) と、やや北のパグワテ (Paguante) の 6 つの村からなり、1,700 ～ 1,900 メートルの標高に位置している。村の総人口は 3,845 人 (2000 年)、うちプエブロ・

ラグーナは 3,669 人であるが、保留地外に居住している人も含めればプエブロ・ラグーナの成員は 7,309 人を数える。

ラグーナ村はラグーナ全体の中心地である。1996 年筆者の訪れたのは、このラグーナ村と、ウラニウム鉱山の開発によってもっとも大きな影響を蒙ったパグワテ村であった。ラグーナ村はなだらかな傾斜地にあり、パグワテ村はインターステート 40 を横切った反対側の小高い丘にあり、眼下にラグーナ村を一望する位置にある。ラグーナ村に入ると、ひときわ目につくの



6 村概略図

が、フランシスコ修道会によって 1699 年頃、建設された聖ヨセフ教会であり、9 月 19 日は全村を挙げて聖ヨセフの祭礼がある。

プエブロは長い間トウモロコシ、カボチャ、マメなどの農耕を中心として生活してきた。最初のヨーロッパ人との接触はスペイン人がリオ・グランデ峡谷に進出した 16 世紀であり、それ以後スペイン人によって導入された羊の飼育を行うようになった。1821 年、メキシコ支配下に入り、やがてアメリカ・メキシコ戦争の結果、この地方一帯はアメリカに割譲された。しかしアメリカ政府が彼らの土地の権利保護を適切に行うことを怠ったため、多くの外来者がプエブロの土地に移住するようになった。私有地土地請求裁判所によって、プエブロ・ラグーナの土地権が確定したのは 1898 年のことである。

部族としてのプエブロ・ラグーナのまとまりは 1908 年に制定された最初の成文憲法によるものである。同憲法によって 6 村の連合によるプエブロ議会の創設が定められた。58 年さらに 82 年にこの憲法は修正された。

現在プエブロ議会は知事以下 21 人から成り、ラグーナ村にある会議場で毎週議会を開催し、立法および司法その他関連事項の審議を行う。またそのほかに各村内にも村議会があり毎週議会が開かれる。18 歳以上の男性成員はこの村議会に出席することが求められている [New Mexico: 446-447]。



パグワテ村から見たラグーナ村



聖ヨセフ教会

## 2. ウラニウム鉱山の開発

人類初の原子爆弾を使用して日本に勝利したアメリカは、第2次世界大戦後もソビエトとの間で冷たい戦争を繰り広げていた。優れた原子爆弾をソビエトに先んじて製造するために、ウラニウム採掘はもっとも重要な軍需産業であった。アナコンダ銅採掘会社がラグーナの保留地でウラニウム鉱床を探索する許可を得たのは1951年のことである。その年の11月、飛行機の頭部にガイガー計測器を設置して飛行したところ、パグワテ村の近くでガイガー計測器の数値が突然上昇し、探査したところこの付近から良質なウラニウムの鉱床を発見したという。この鉱床はジャックパイル (Jackpile) と呼ばれるようになった。この地域におけるウラニウム採掘の経緯について、以下主としてシットニック (Sittnick, P.) によってラグーナ中学校用に作成された学習指針『ウラニウム鉱業とラグーナ・プエブロへの影響』に基づいて記述してみよう。

会社はプエブロ・ラグーナから土地を借り、この土地を使用してウラニウムを採掘する権利を得る代わりに、ラグーナに鉱山賃賃料を支払うこととなった。この契約に際してはアメリカインディアン局 (BIA) が仲介をしている。貸借契約は52年の20平方キロ、63年に10平方キロ、さらに76年に1.3平方キロと3回にわたって締結され、計32平方キロ弱の土地がウラニウム採掘のために使用されることとなった。

すでにこれより以前からプエブロ・ラグーナより西方のグランツでも、ウラニウム採掘が行われていたが、そこでは地下採掘の方法が取られていた。しかしジャックパイルの鉱床は広大で、地下で作業する鉱夫に新鮮な空気を送ることが困難であったことから、会社は鉱床を覆っている大量の地表土を除去して、露天掘りを行うこととした。

58年の暮れまでにはこの地区から産出するウラニウムは、ニューメキシコ州で採掘されるウラニウムの70%を占めるまでとなった。その後閉山するまでの29年間に、会社は3つの露天掘りと、9つの地下鉱山を操業していた。

ジャックパイルは3つの露天掘りの中で最大のもので、採掘現場は地面か

ら 190 メートルあまり深く、70 階建てのビルがすっぽり埋まるほどであった。他の 2 つの露天掘り場である南パグワテは 100 メートル、北パグワテは 60 メートルの深さであった。

やがて採掘事業はアナコンダ社からアトランティック・リッチフィールド社（ARCO = アルコ社）に引き継がれた。

操業は休みなしの 1 日 24 時間、また 1 週 7 日続けられた。鉱山会社の従業員はほぼ 800 人で、そのうち 7 割がラグーナであり、彼らはガイガー探知機、削岩機、重機、砕石機の操作やトラック運転、また事務関係など、あらゆる労働に従事していた。給料は悪くはなく、また鉱区使用料でラグーナは潤った。とはいえこれらの金額はアナコンダやアルコ社の得た収益の 1% にも満たなかったという [Sittnick 1998: 16-17]。当時鉱山労働者賃金は年収 17,000 ~ 18,000 ドルであったという [Albuquerque Journal Sunday, October 19, 1980]。

鉱山操業中は鉱区使用料として 7,100 万ドル、リース料 20 万ドル、ラグーナ・コミュニティ会員には手数料として 8,500 万ドル以上が支払われた [Helms 2007]。

### 3. ウラニウム鉱山の閉山

好況に見えたウラニウム採掘も長くは続かなかった。冷戦の終結、他地域でのウラニウム鉱山の開発などいくつかの理由により、ラグーナの鉱山は価格競争に敗れ 1982 年閉山に至った。

再びラグーナ中学校学習指針の『ウラニウム鉱業とラグーナ・プエブロへの影響』によれば、保留地人口の失業率は 70% であったが、操業時は 20% に下がった。人々が給料や鉱区使用料を手に入れて景気のよかった頃、収入はテレビ、車など消費財の購入に用いられ、その生活水準は格段に向上した。また集落内にビルを建て、道路を舗装し、各戸毎の上水道を整備するなど、この鉱山のおかげで、彼らは全プエブロ中もっとも裕福になった [Sittnick 1998: 17]。筆者がパグワテ村を訪れたのは、閉山から 15 年ほど経っていたが、埃っぽい広場や家が目についた。インフラは適度に整備され、小規模ではあ

るが新しい公共住宅が何棟か建てられており、昔風の家と曲がりくねった村道、祭儀広場などのあるラグーナ村とは対照的であった。

しかし収入増加によるアルコール消費の増大、麻薬の浸透、犯罪の増加、さらには鉱山会社に就職するために、学業を全うすることなく中途退学する若者も多くなっていた。

閉山に伴って失業率は再び70%台に上昇した。そして村に残されたものは何であったのであろうか。

### (1) ウラニウム放射線による深刻な人体被害と水質汚染（バグワテ川）、 果樹園・農地・牧草地の汚染

ウラニウムの危険を知らされていなかった労働者は後年癌の発病に苦しむことになる。<sup>1</sup> また埋め戻された土地は農耕や牧畜に使用することは不可能である。

### (2) 広大な採掘跡地

掘削された採掘跡地は当時世界最大規模のものであった。当初の約束では終業時にはアナコンダ社が埋め戻すことになっていたが、アナコンダ社を引き継いだアルコ社との交渉には7年間を要した。最終的に89年アルコ社は4,500万ドルを支出し、ラグーナ自身がその作業を引き受けることになった。それがラグーナ建設会社である。



新築の公共住宅



昔風の家（祭儀広場の近く）



### (3) 爆破によるバグワテ家屋被害

彼らの居住していた伝統的の石造りの家は爆破の度に振動を受けて、ひび割れを起こした。ウラニウム放射線による環境汚染と鉱山採掘の爆破による家屋被害など荒れ果てた光景のバグワテ村はラグーナ村と対照的である。

## 4. 経済の建て直し

鉱山会社から得た鉱区使用料は、個々人に分配されることなく、株券、公社債、不動産などに投資された。また一部は近代的行政府の建築、その他成員の生活環境の整備に当てられた。こうした資産のおかげで閉山後の経済再建に取り組むことが出来た。

### (1) ラグーナ建設会社

埋め戻しをラグーナ自身が引き受けることにより、アルコ社から支出された4,500万ドルを基金として、89年ラグーナはラグーナ建設会社を設立した。ウラニウムという危険物質採掘地の埋め立てのため特殊な方法が必要とされたため、89年から94年までの5年間かけて埋め立てはほぼ完了した。会社は75人の従業員を抱え、90年代からは空軍とも契約していくつかの州で5年間3,700万ドルの事業を行ってきた。また19万ドルの契約で2004年からはイラクの国防省の建物の修復などを行なっている [Laguna Construction Company, Inc. 2007]。



ラグーナ建設会社立て看板

## (2) ラグーナ製造会社

保留地内で最大の企業で 1980 年にメシタ村に設立された。従業員 220 人のうち 85% がラグーナの成員である。年収 1,500 万ドルで金属板製造、電線、電気部品組み立て、通信防護用装備（アメリカ国防総省との契約）などを生産しており、事業拡大の方向にある。

## (3) ラグーナ商会

ラグーナ商会はスーパーマーケットとガソリン給油施設を含むカサ・ブランカ・マーケット・プラザを経営しており、42 人が雇用されている。マーケット内には小規模の商店もあり、人々は自作のベルト、アクセサリーや土器、バスケット、絵画などを販売することも出来る。

## (4) ラグーナ・レインボー・センター

高齢者の長期療養施設で 45 人が働いている。このほかアコマ・カノンチト・ラグーナ病院もあり、勤務者は 150 人である [New Mexico : 447]。

## (5) カジノ

経済開発として一番遅れて登場したのがカジノであるという事実は大多数の部族について言えることである。ニューメキシコとアリゾナに分布する 19 を数えるプエブロは例外なくカジノを経営している。ラグーナのカジノは、他のプエブロよりその開設が遅れた。現在ラグーナの経営するカジノは、ダンシング・イーグルとルート 66 の 2 箇所である。アーバカーキ郊外にあるルート 66 は、シカゴからこのラグーナ保留地を通過してロサンゼルスに至る有名な旧ハイウェイの名に因んで付けられた名前を持つカジノで、週日は午前 8 時から午前 3 時まで、週末は 24 時間営業で 1250 台のスロットマシンに 3 つのレストランを併設する大賭博場である。カサブランカのハイウェイに近いダンシング・イーグルもルート 66 同様、ラグーナの住民以外の旅行者を呼び込むことを目的としている。

ラグーナの場合は、カジノ経営の歴史は浅く、その将来性は未知数である。今のところ、ラグーナのカジノの収益は公表されていない。将来ニュージャージー



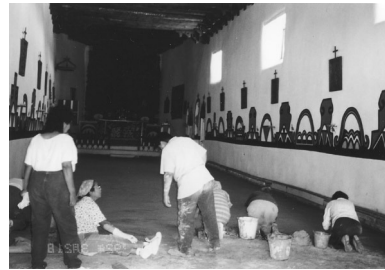
ジー州ピーコット経営のカジノのように、その収益によって文化再生のチャンスを手繰るかどうか現在のところ不明である。

## 5. 文化の再興

自己の保留地の中でのウラニウム鉱山の開発というネイティブ・アメリカンの中でも稀有な経験を通して、ラグーナは自分たちの文化にどのように向かい合ってきたのであろうか。鉱山開発は彼らの生活にある意味では致命的な打撃を与えたが、鉱山から得た鉱区使用権を有効に利用することによって、経済の壊滅的破壊は免れた。

### (1) キリスト教会との習合

幸いなことに、ラグーナの重要な伝統的祭儀は世代を超えて今日まで受け継がれてきている。さらに 1700 年代初期に導入されたキリスト教は、ラグーナの伝統として今日に息づいている。以下は 2007 年に 6 村で行われた祭礼暦である [Calendar of Native American Events and Dances]。



若者達が聖ヨセフ教会堂床の修復作業を行っている

3 月 19 日	ラグーナ村	聖ヨセフ祭	収穫踊りほか
7 月 26 日	セアマ村	聖アン祭	収穫踊りほか
8 月 15 日	メシタ村	聖母昇天祭	収穫踊りほか
9 月 8 日	エンシナル村	収穫踊り	社交ダンス
9 月 19 日	ラグーナ村	聖ヨセフ祭	バッファロー踊り、鷺踊り、社交ダンス
9 月 25 日	パグワテ村	聖エリザベス祭	収穫踊りほか
10 月 17 日	パラエ村	聖マーガレット祭	収穫踊り、社交ダンス
12 月 24 日	ラグーナ村	10 時の礼拝終了後ダンス	

バッファロー踊り、鷺踊りといった元来教会には関係のないプエブロの伝統儀礼が、キリスト教の祭礼と合体して行われている。教会暦による一年のリズムがラゲーナの儀礼・祭礼の時を決定しているようである。

これらのラゲーナ内の祭りに加えて、大半のプエブロによっておこなわれる行事や祭礼などに、ラゲーナ・プエブロも参加している。これらにもイースターやクリスマスがプエブロの古い祭礼時と合体している例がみられる。たとえば、イースターには、大半のプエブロはトウモロコシ踊りをおこなう。

## (2) ラゲーナ語と伝統文化の保持

キリスト教が導入される以前のラゲーナ文化として、ラゲーナ中学校長はラゲーナ語の重要性を強調していた。ラゲーナ語は他のプエブロと共にケレス語に属するが、ケレス語自体、ネイティブ・アメリカンの他の言語と関連を持たない孤立語であるといわれ、1990年現在ケレス語話者は4,580人に過ぎないそうである。ラゲーナの人々の話していた言語は7つの方言の一つで西ケレス語に属する。彼らの言語は言語学的にはケレス語であるが、ここではラゲーナの人々の一般的使用法に従ってラゲーナ語と表記しておく。

彼らの母語衰退の最初のきっかけは、鉄道とハイウエイがラゲーナ保留地内を横断した当時に遡るが、とくに顕著になったのは1950年代ウラニウム鉱山採掘が始まった頃からである。鉱山事業はラゲーナに主流社会とのこれまでにない相互関係をもたらした。鉱山採掘では労働者として多くのラゲーナ住民が雇用され、現場で外部からの労働者と日常接触するようになった。こうした状況下の1970年代半ばに、母語教育の重要性がコミュニティの人々に意識されるようになり、母語が消滅しないように種々な試みがなされ、いくつもの計画や個人的な努力が払われた。そのなかでも顕著であったのは、ラゲーナ語辞書を編纂する試みや、いくつかの村でラゲーナ語の教室が設けられたことであった。

1991年ラゲーナ中学校（ニューメキシコ州では部族が企画・建設・運営を始めた最初の中学であった）は、言語・文化に馴染むための2年間の予備的研究を始めたが、資金不足でそれ以上続くことはなかった。しかしその年に小学校とヘッドスタート（小学校就学前の子供たちに、色彩の名称、文字

の読み方、鉛筆の使い方など基本的なことを教える場）がラグーナ語の学習クラスを始めたのである。

2003 年 9 月ラグーナの教育省長官サンチェスはヘッドスタート計画の再認可に関する上院公聴会において以下のように述べている。

ラグーナ・プエブロは思想、教育、家族をたいへん重要と考えているが、同時に我々の伝統文化と儀礼にも大きな価値を置いている。幼児期は認識上、身体上のみならず、社会的、文化的意味においても、生涯を通じて発達をする上で、きわめて重大な時期である。我々の慣習では、子どもたちはすべての人に属している。我々の伝統ではすべての大人が家庭やその他の場所で子どもたちと共にいることで、教育が行われてきた。しかし大部分の大人たちは現在収入を得ることに忙しく、昔のように子どもたちと付き合うことはできない。それ故、昔のような文化と伝統についての教育はヘッドスタートや、初期幼児プログラムによって補わなければならないとなった。・・・

文化についての教育において重要なのは言語の保持である。我々の誰もが言葉を十分に理解しなければ、我々の文化を十分に理解することは出来ない。これまで言語と文化は各家庭で親たちから世代を通じて伝えられてきた。

・・・ラグーナであるために、そしてラグーナが世界に存続するために、ラグーナの世界観、価値観、信仰、規範、技能は世代を通じて伝えられなければならない。ラグーナ個人ないしはコミュニティへのアイデンティティがあるというならば、歴史、親族の役割、クラン組織、人生儀礼について知らなければならない [Sanchez 2003]。

冒頭に掲げた長老賛美の文章は、ウラニウム鉱山の開発と閉山という急激な文化的・経済的变化の中で、ラグーナの人々が感じている深刻な危機意識を表しているともいえよう。こうした努力にも拘らず、母語を話せる住民が次第に減少しているという事実があり、1990 年の国勢調査ではラグーナ・プエブロにおける母語の話者は 1,695 人に過ぎない。

### (3) 伝統文化再生と技術文化の折り合い

これまでラグーナ住民は多面的に現代科学技術に関心を持たざるを得ない環境に置かれてきた。伝統文化再生と技術文化の折り合いをどうつけるか

は、住民の関心事である。筆者が1998年7月、訪問したラグーナ中学校長チェロミア（Nicholas Cheromiah）氏の話は、日進月歩する科学技術と彼らの伝統的文化をどう組み合わせて教えるかという課題が中心であった。彼は伝統的文化、とくに歴史に注目し、その継承に科学技術を役立てることを考えている。さらに現在の文化にも関心を示していた。ラグーナ文化の再生の歩みは始まったばかりである。

プエブロ・ラグーナに近接するイズレットプエブロの街並で見かけた掲示板には、カジノで儲けたお金で母の日にお母さんに贈り物をしようなどと書かれていた。それはカジノの日常性を窺わせるとの印象を強くする。部族文化は伝統的性質のものばかりでなく、外部からのアメリカ的慣習・生活様式がすでに取り入れられており、複合的部族文化と名付けたほうが適切であろう。また、カジノが強力な手助けとなり、カジノ文化が部族文化を特徴付けるとも想像される。イズレットの掲示板はその証拠のように思えるのである。



1998年当時ラグーナ中学校長  
チェロミア氏



イズレットプエブロの街並みで見かけた掲示板

## 註

<sup>1</sup> バグワテ村でウラニウム鉱山に8年間働いていたパーリー (Dorothy Purley) は肺癌と診断された。彼女は地下鉱でハンマーを使って岩を砕く仕事に携わっていたが、一度も被爆について聞かされたことはなかった。彼女の母もなくなり、兄は4人の子どもを残してなくなった。彼は30年近くアナコンダ社で働いていたので、彼女は兄が胃癌で死亡したと考えている。碎石工場はバグワテ村の東にあり、風は東から吹いているので、村中に悪臭が常に漂っていた [Sittnick 1998]。また彼女の娘であるガルシア (Carletta Garcia) は次のように述べている。

私は採掘のもっとも盛んな時代にバグワテ村で育った。ほぼ毎日昼と夕食の頃爆破を知らせるサイレンの音が鳴り響く。子どもたちは爆破を見るために外に飛び出し、大人は家が壊れるのを心配して外に出た。もし風が村の方向に吹いてきている時には、粉塵がすっぽり村を覆い、硫黄のいやな臭いが何時間も家の中にとどまっていた。母は高品質の鉱石を運搬する大きなトラックの運転手となり、友達とその鉱石の上でよく弁当を食べた。誰もウラニウムが危険だと知らなかった。私はアコマ保留地で育った男性と結婚したが、彼も皮膚癌と診断された [Garcia 2007]。

## オンライン資料

"Calendar of Native American Events and Dances." *The Pueblo of Santa Ana*. 2001.

<<http://www.santaana.org/calendar.htm>> (accessed 15 Mar. 2008)

Garcia, Carletta, "Laguna and Acoma Pueblos." *Voices from the Earth*. Vol.8 No.2, 2007. Southwest Research and Information Center.

<[http://www.sric.org/voices/2007/v8n2/laguna\\_and\\_acome\\_pueblos.html](http://www.sric.org/voices/2007/v8n2/laguna_and_acome_pueblos.html)> (accessed 15 Mar. 2008)

Helms, Kathy. "Tribal officials blast new wave of uranium mining." *Independent*. November 1, 2007.

<[http://www.gallupindependent.com/2007/november/110107kh\\_urnmmng.html](http://www.gallupindependent.com/2007/november/110107kh_urnmmng.html)> (accessed 15 Mar. 2008)

Iwamoto, Kim Coco. "Pueblo of Laguna Tribal Government Profile." *Tribal Law Journal*. Ed. Frank Cerno.

<[http://tlj.unm.edu/articles/volume\\_2/laguna/index.php](http://tlj.unm.edu/articles/volume_2/laguna/index.php)> (accessed 15 Mar. 2008)

Laguna Construction Company, Inc. "Windfalls of War." *The Center for Public Integrity*. 2007.

<<http://www.publicintegrity.org/wow/>> (accessed 15 Mar. 2008)

*New Mexico* (PDF).

<<http://www.cnr.berkeley.edu/classes/espm-50/30NewMexico.pdf>> (accessed 15 Mar. 2008)

Purley, Dorothy. "Uranium Mining and the Laguna People, interviewed by Susan Lee July 1995 in Paguate Village on the Laguna Pueblo Reservation." *Synthesis/Regeneration* 10: Spring 1996.

<<http://www.greens.org/s-r/10/10-07.html>> (accessed 15 Mar. 2008)

Sanchez, Gilbert. "Written Testimony Regarding the Reauthorization of the Head Start Program before the United States Senate Committee on Indian Affairs." September 25, 2003.

<<http://www.senate.gov/~scia/2003hrsgs/092503hrg/sanchez.PDF>> (accessed 15 Mar. 2008)

Sittnick, Philip. "Uranium Mining and Its Impact on Laguna Pueblo A Study Guide for an Interdisciplinary Unit." *MiningWatch Canada*. July, 1998.

<<http://www.miningwatch.ca/updir/umine.pdf>> (accessed 15 Mar. 2008)

## 新聞

*Albuquerque Journal* Sunday, October 19, 1980.